

廃名『莫須有先生伝』訳稿（四）

Fei Ming's Moxuyouxiansheng zhuan：A Transportation（4）

張 雪晶*・山田 史生**

Xuejing ZHANG*・Fumio YAMADA**

要 旨

廃名（1901～1967）の前衛的小説「莫須有先生伝」の翻訳。『廃名集』第2巻（北京大学出版社）所収に拠る。

キーワード：廃名 莫須有先生

第十章 莫須有先生は今日は日記を書く

光陰矢のごとし、時がたつことのはやいことといったら、いつのまにやら莫須有先生の昼寝の時間になっていた。目をつぶってはみるものの静寂にひたりきれるというわけでもなく、この世のなかには吾輩をほうっておいてくれるものはひとつもなくて、おだやかに暮らしているとながれる水のさわがしいのもイヤだし、のんびり生きていと空をただよう雲のいそがしいのにも笑えてくるというのに¹、うちの裏のほうにいる躰のなっていないワルガキが吾輩の住まいの壁に吾輩のことをバカにした落書きをしおって、やっこさんは莫須有先生がそれを見たら激怒するだろうとおもってかいたにちがいないのである。ねんねんころりよ、おころりよ、坊やはよい子だねんねしな²、と今朝はやく散歩をしたときにもそいつを口ずさんでみたのだが、まったく吾輩ときたらまるで斬新なスローガンでもとなえたかのようなつもりになってしまっ、落書きにコロリとひっかかっているのだから笑ってしまう。それにしても散髪屋のところ金運アップと貼りだしてあるのは³、哲学的な意味などこれっぽっちもなさそうであって、まったくもってイヤな気分させられる。こういうのを『自己チューの歌』というのである⁴。吾輩はおちおち眠っておれやしない。村の奥まった路地ではイヌが吠えまくっているし、桑の木のとっぺんではニワトリがやかましく鳴いているけれども⁵、いったい吾輩がなにをしたっていうの？ それをきいて詩情をもよおしたりすればますます眠れな

くなってしまうし、かといって口汚くののしったりすれば、まさしく父をないがしろにし君をおろそかにするような禽獣にもひとしい野蛮なやつだっということになってしまうではないか！⁶ 村のなかでケンカをしているやからがある⁷。ひょっとすると酔を借りにきたのかもしれない⁸。『子どもの歌』では八月十五日の月明かりをうたっている⁹。七月七日の針に糸を

- 1 韋荘（836?～910）「山墅閒題」（『浣花集』卷五）静にして極めて却嫌す 流水の鬧がしきを、閒にして多に翻笑す 野雲の忙しきを（静極却嫌流水鬧、閒多翻笑野雲忙）
- 2 原文の「天皇皇、地皇皇、我家有个夜啼郎」は子どもを寝かしつけるときの文句。昼寝ばかりにしている莫須有先生をからかって裏のワルガキはこの文句を落書きしたのである。
- 3 原文の「对我生財」は金持ちになれますようにというスローガン。
- 4 原文の「我我歌」は不詳だが、オレオレ歌、オレさま歌、といった意味合いか。
- 5 狗は吠ゆ 深巷の中 鶏は鳴く 桑樹の顛（狗吠深巷中 鶏鳴桑樹顛）陶淵明「歸園田居」其一
- 6 父を無みし君を無みするは、是れ周公の膺つ所なり（無父無君、是周公所膺也）『孟子』滕文公下
- 7 郷鄰に闘う者有り、被髮纓冠して往きて之を救わば、則ち惑いなり。戸を閉ざすと雖も可なり（郷鄰有闘者、被髮纓冠而往救之、則惑也。雖閉戸可也）『孟子』離婁下
- 8 子曰く、孰か微生高を直しと謂うや。或ひと醜乞いたるに、諸を其の隣に乞いて之に与えたり（子曰、孰謂微生高直。或乞醜焉、乞諸其隣而与之）『論語』公治長
- 9 未詳。孺子有り歌いて曰く、滄浪の水清まば、以て我が纓を洗濯う可く、滄浪の水濁らば、以て我が足を濯う可し、と。孔子曰く、小子之を聴け。清みては斯ち纓を濯い、濁りては斯ち足を濯うは、自ら之を取るなり、と（有孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足。孔子曰、小子聽之。清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也）『孟子』離婁上

* 陸奥新報社

** 弘前大学教育学部国語教育講座

とおす夜¹⁰、真夜中にだれも私語するものはいないというのに吾輩にはきこえるんだ！ 針が落ちたときみたいだね。おおかた吾輩はもう眠っていて、だから寝言をいったんだろう。なにひとつとして非凡なおもいつきが浮かんでいるわけではなくて、たぶん昼寝していたことをとりつくろおうとしたのである。あんたたちにはわかるまいとおもうが、木や石のあいだに住み、シカやブタといっしょに遊びほうけるといったテイタラクなのであって¹¹、いっそのこと舞台のしたで眠りこけているほうがマシなくらいである。とはいえ吾輩にはあなたたちには金輪際たどりつけっこないところもあるのであって、というも吾輩はひどく神經過敏ではあるけれども、精神は肉体によりそっており¹²、まえかとおもえば、たちまちうしろ¹³、なにはさておき自分のありようをハッキリとわきまえている。とはいえ吾輩にとって夢をみることはかけがえのないことなのであって、なにはともあれ吾輩は夢をみるのだが、夢、まさに夢をみているときには夢だということには気づかないわけで¹⁴、吾輩が夢にみるのはあの娘のこと、娘、その娘というのはいかにも村の小娘といったすがたであられるのだが¹⁵、その父親がたいそう金持ちの、おとなしい別嬪さんで、きくところによると月ねえちゃんは商人にとついでらしいが¹⁶、そのころ史湘雲と薛宝釵とはなかよしで¹⁷、ふたりはいつもいっしょに裁縫なんぞをしていて、庭いっばいにワスレグサがはえているなか、ちょうど巾着に刺繍していると、なにかこころに浮かぶことがあったのか、針もうごかさずにだまりこみ、おねえちゃんはひと目でそのこころを察し、たずねていうには

「なに考えてるの？」

「夢をみたの」

「どんな夢？」

「どんなって——いわない！」

「いわなくたってわかるわ——あたしはなんでも話してあげるのに、あんたはなんにも話してくれないのね！」

吾輩もどんな夢なのかすぐに知りたくてしょうがなく、たかが夢ごとのことで、なんでもったいぶっちゃうわけ？ あの娘、娘、えらくもったいつけちゃっているみたいだけど、とはいえ北京の女子大生が召使いにいつけてピーナッツを買いにやらせたときに召使いが金をくすねるのを心配するというふうなのとはちがって、べつにケチなわけじゃなくて、じっさい道楽者がさんざん贅沢三昧にうつつをぬかすのにくらべれば大空はひろびろとして鳥の影ひとつないといったふうであり、一本の鍵によって一切合切をしまいこんだものだけで足りりとしている。

「おねえちゃん、このふたつの詩句はどうおもう？」

こんなふうでこんなふうで、こんなふうになんかふうに、かわいい娘は「このふたつの詩句」を手のひらにかいてみせたらしく、ところが夢のなかなんもんで吾輩にはただかわいい手と、その手のひらにつけられた田舎の女の子がつかう口紅がみえただけで、ふたつの詩句とやらはまったくみえなかったんだけど、おねえちゃんはその手をとみこらみしている。その証拠として詩をあげてみる。

「我が一床を破す胡蝶の夢、他の双枕を輪す鴛鴦の睡」¹⁸

このふたつの詩句はしょうもなく、どうしたものかどうしたものか、かわいい娘はなんだか腹がたってきたみたいで、ひどく不機嫌になって、こういふのだ

10 裁縫の上達をねがう行事。「穿針楼」は「漢宮女於七月七日登開襟楼、穿七子鍼」とあり、「乞巧」は「旧時的一種風俗。伝説農曆七月七日夜天上牛郎織女相会、婦女於当晚穿鍼、称为乞巧」とある（『辞源』第三版）

11 孟子曰く、舜の深山の中に居るや、木石と居り、鹿豕と遊ぶ。其の深山の野人に異なる所以の者は幾ど希なるも、其の一善言を聞き、一善行を見るに及びては、江河を決きて沛然たるが若く、之を能く御むるもの莫きなり（孟子曰、舜之居深山之中、与木石居、与鹿豕游。其所以異於深山之野人者幾希。及其聞一善言、見一善行、若決江河、沛然莫之能御也）『孟子』尽心上

12 ここも陶淵明「形影神」を意識しているかもしれない。

13 顔淵、喟然として歎じて曰く、之を上げば弥いよ高く、之を鑽れば弥いよ堅し。之を瞻れば前に在り、忽焉として後に在り。（顔淵喟然歎曰、仰之弥高、鑽之弥堅。瞻之在前、忽焉在後）『論語』子罕

14 夢に酒を飲む者、且にして哭泣し、夢に哭泣する者、

且にして田獵す。其の夢みるに方りては、其の夢なるを知らざるなり。夢の中に又其の夢を占い、覺めて而る後に其の夢なるを知るなり（夢飲酒者、且而哭泣、夢哭泣者、且而田獵。方其夢也、不知其夢也。夢之中又占其夢焉、覺而後知其夢也）『莊子』齊物論

15 静かなる女の其れ妹きが 我を城の隅にて俟つ（静女其妹 俟我於城隅）『詩經』邶風「静女」

16 月姉は月にすむ女神の嫦娥をいうが、ここはおねえちゃんの名としておく。

17 史湘雲と薛宝釵とはともに『紅樓夢』の金陵十二釵のひとり。

18 斗帳高眠、寒窗静、瀟瀟雨意。南楼近、更移三鼓、漏伝一水。点点不離楊柳外、声声只在芭蕉里。也不管、滴破故郷心、愁人耳。無似有、游糸細。聚復散、真珠碎。天応分付与、別離滋味。破我一床蝴蝶夢、輪他双枕鴛鴦睡。向此際、別有好思量、人千里（宋・佚名「滿江紅」）

「いいまちがったわ！ あたしはあのひとが——」

「わかってるわ！ わかってるったら！ この七文字はあんたの夢にでてきたんでしょ？ あんたはあのひとを——その「あのひと」っていうのはだれかさんのことを知っているんでしょ？ お婆さんはまだこの娘のことをどうするつもりもないっていうのに娘のほうではお嫁にゆこうとしているんだわ！」

口達者なおねえちゃんが妹の顔を真っ赤にさせたのを吾輩は夢のなかでみてしまい、夢のなかで吾輩はおとなしい娘のうしろに隠れてこっそりと十字をきった。ところでこの月ねえさんのひととなりはおそろしく強烈で、たとい妹が相手であろうともいささかも手加減することなく、まるで満州族の連中みたいに面倒くさがりで、ところかまわずツバを吐きちらすし、吾輩なりに皮肉をいわせてもらえば、そうだなあ、観音菩薩の手のひらにキレイな水のはいった瓶がのっかっていて、そのキレイな水のはいった瓶にはヤナギの枝が一本さしてあるだけけど、これを人間にふりかけるさいの身のこなしのうつくしさといったら、それはもう動物園のライオンの口からほとぼしる水流のようにつくしく、といている吾輩の話がまだおわらないというのに、ほらみてほらみて、観音菩薩よ観音菩薩よ、ほらみてほらみてといいながら吾輩の顔にむけてツバをとばし、おねえちゃんは笑いころげ、吾輩は、吾輩は——目がさめた！ 目がさめてみれば家主の奥さんがむこうのほうでお湯をわかして吾輩のふんどしにアイロンをかけているようである。まったく奇妙だ、こんなヘンテコな夢をみるなんて、まあとりあえず下品でないからよかったようなものだが、吾輩が声ひとつたてずに目をパッチリとひらくと、ちょうどお昼ころで、玄関のあたりの木陰がよい具合に涼しそうなので、吾輩はひとまずそとにでて涼むのもよからう、とおもうまもなく莫須有先生のすがたはもう木陰にたたずんでおり、ふわふわふわ、あおむいてアクビをする。そうこうするうちにむかいのうちらからあらわれてきた背のひくい男はどうやら地球からはなれられなくなったらしく、そのまま戸口のところにたつたっているもんだから、莫須有先生はその男をまじまじとみつめる。かれはみられているとは気づいていない。まさに人生における新鮮なひとこまである。そうこうするうちにむかいのうちらから老女が¹⁹そとにでるときには戸をとおらないものはないといった風情であらわれてきたが²⁰、なにやら寝ぼけ眼をこすりながらヨロヨロと足もともおぼつかなく、どうやら靴がこわれているのに気づいていなかったようで、あははとわら

いながら自分でたちあがると、あたしったらもう！

——あたしは身なりをかまわないけれども、お乳をのませてさえくれればだれだってお母さんなわけで、あたしも三年のあいだにふたりの子どもを産んだんだから、あんたみたいな背がひくいのにみられたってビビったりはしないのさ！ よそからやってきた莫須有先生に文句をいわれるのを心配しているだけで、あたしたち満州族の女はみっともないとおもわれるのはイヤだし、たった角門²¹のところまでタバコを買いにゆくときにさえ、ちゃんといったんひっこんで、きちんと身づくろいしてからでかけるくらいなわけで、だからさつきちょっとだけ顔をだしたときもすぐにひっこんだのさ。すると背のひくい男はまったくおどろいたことに^{22,23}、もうどうしようもなく、まったくひどいもんだ、まったくひどいもんだ、ここ数年というものちっとも好いことなんてないし、今日だってまったくひどいもんで、ちょっと涼もうとおもってでてきてはみたものの、莫須有先生なんかとおしゃべりするのは億劫だし、どんなにひもじくたってあんたにへつらうつもりはないよ、といて家にもどってゆく。莫須有先生はたちどころに悟ったのだが、ふたりはでてきたかとおもうと、ふたりとももどっていった。ところが莫須有先生は三人になるまえまでは自分だけがポツンとひとりぼっちだということにさっぱり気づいておらず、三人になってみれば自分ひとりだけが仲間はずれなのであって、こんなにたくさんある木陰をたったひとりでそぞろ歩きするなんてもったいない話なわけで、とぎれとぎれに考えてみるに、だれにとっても時はおなじようにながれ、だれもみなおなじように夢をみるのだけれども、ただしその夢はみんなちがうのである。やがて涼しい風がすうっと吹いてきて²⁴、なん

19 徐娘は「指梁元帝（蕭繹）妃徐氏。南史后妃伝下、徐娘雖老、猶尚多情。後称年老而尚有風韻的婦女為徐娘」（『辞源』第三版）

20 子曰く、誰か能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由ること莫きや（子曰、誰能出不由戸。何莫由斯道也）『論語』雍也

21 角門は、北京市豊台区の地名か、勝手口のことか、よくわからない。乞示教。

22 書空は「用手指在空中虚画字形」咄咄怪事は「晋殷浩被桓温免、一天到晚用手在空中写「咄咄怪事」四字。後來常用来形容出乎意外、令人驚異的事情」（『辞源』第三版）

23 時日曷喪、予及汝皆亡『尚書』湯誓

24 常に言う、五六月中、北窓の下に臥し、涼風の暫に至るに遇えば、自ら謂えらく、是れ羲皇上の人なり、と（常言五六月中、北窓下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人）陶淵明「与子儼等疏」

という気持のよい風であろうか。

そんなふうになっていると毎日かならずシャオピン²⁵売りがやってきて、シャオピンを買わせようとして売り声をはりあげ、シャオピンはどうかね、そこで莫須有先生はそのシャオピン売りにたずねて

「なにをしているのですかな？」

「シャオピンを売っているのさ」

シャオピンを売っている、それをきいて莫須有先生がのけぞるようにして大笑いしていると、そこに天秤棒で水をはこぶものもやってきて、シャオピン売りはこの場からはなれる気はないようだし、天秤棒で水をはこぶものもここで涼んでゆこうという気になったらしく、じゃあここで涼むことにするかというのだが、莫須有先生はなんにもたずねようとはせず、というものかれのことは顔見知りのようで、だからこんなふうに言葉をかけて

「おまえさん全身が汗まみれじゃないか」

おまえさん全身が汗まみれじゃないか、といいながら莫須有先生はまたそぞろ歩きをはじめめる。

莫須有先生はそぞろ歩きをはじめめる。そぞろ歩きをして北極までたどりついたら、どうせ地球はまるいんだし、莫須有先生はのけぞるようにして大笑いし、そうだ吾輩は禅宗の弟子なのだ！ とはいえ吾輩には感嘆符はつかない。毎日やってくる便所の汲みとりがせわしなくペコペコしながら道をあけてくれと莫須有先生にむかってわめきながら曲がりくねったところをやってくる。すると莫須有先生のうちのイヌが肥桶をかついだ汲みとりにけたたましくほえかかったもので、莫須有先生はビックリしてあたふたしてしまう。莫須有先生はあわてて世間のひとびとに愛想をふりまきながら挨拶をかわす。

「お歴々はこの木陰で涼むのがお好きのようですね？」

居ならばお歴々は莫須有先生のうちの門前でうちそろってひそひそと私語をかわしはじめるが、莫須有先生にはなにをいっているのかさっぱりわからない。肥桶をかついだ汲みとりはまだ肥桶をかついだままで、

あんたはさっきまでうごきまわっていたくせに、いまはたちどまっているけど²⁶、天秤棒で水をはこぶものは天秤棒をおろして坐禅をすることができ、シャオピン売りはすぐさまわめきたてて、ここにいるよここにいるよ²⁷、そこにひとりのおばあさんが娘の産んだ女の子をだっこしてやってきてシャオピンを買う。

「あなたたちは博打が好きなのかい？²⁸ 賭げごとつというのもおもしろそうだけど、ちょうどこういった大空のしたでやるのにもってこいだし、まるで葬儀屋が野辺おくりをするみたいに、あんたたちも知っているとおり、ほらあの居眠りしている連中もおもしろいじゃないか」

しゃべっている最中にもうみんないなくなってしまう、それはまるで葬儀屋が野辺おくりをするために棺桶についてゆくみたい、というか、棺桶をかついで走り去ってゆくようである。人生というのは出会いがあればこそおもしろいと莫須有先生はおもっており、道ゆくひとびとをながめやる。莫須有先生が身をひそめているところは²⁹南北にながくのび、また東西をつらぬいてもいて、だから十文字街とよぶべきものである。

さっきシャオピンを買ったおばあさんは、うしろに住んでいるいちばん年上のおばあさんで、孫をだっこしながらその娘の産んだ女の子がシャオピンを食べているのをみていたが、莫須有先生にむかってをびよこんと首をかしげると、おもむろにしゃべりはじめる。

「これはあたしの孫なんだけど、まだたったの八ヶ月で、満一歳の誕生日もきていないっていうのに、そうはみえないでしょ？ よその一歳半の子くらいにみえるでしょ？」

「吾輩はなんにも意見をいうつもりはない」

「この子は山東省の生まれでね、この子の父親は山東省ではたらいでいて、去年あたしが奥さんをつれておゆきといったんだけど、赤ちゃんが生まれたんだから奥さんを帰ってこさせなさいといったのさ」

「吾輩のいったことはまるっきり無視か」

25 焼餅は「『熟的小的發面餅、表面多有芝麻』(『現代漢語詞典』第7版) コムギ粉を発酵させて薄く延ばし、油またはゴマ油のかすや塩などを塗り、ぐるぐる巻いてから適当な大きさにちぎり、円形に整えて天火で焼き上げた食品(小学館『中日辞典』第3版)

26 罔両、景に問いて曰く、曩には子行き、今は子止まる。曩には子坐し、今は子起つ。何ぞ其れ特操無きや、と(罔両問景曰、曩子行、今子止。曩子坐、今子起。何其無特操与)『莊子』齊物論

27 師冕見ゆ。階に及べり。子曰く、階なり。席に及べり。子曰く、席なり。皆な坐す。子之に告げて曰く、某は斯に在り、某は斯に在り。師冕出づ。子張問いて曰く、師と言うの道か。子曰く、然り。固より師を相くるの道なり(師冕見。及階。子曰、階也。及席。子曰、席也。皆坐。子告之曰、某在斯、某在斯。師冕出。子張問曰、与師言之道与。子曰、然。固相師之道也)『論語』衛靈公

28 牧猪奴戯は「指賭博」(『辞源』第三版)

29 躲婆巷は未詳。隠棲するところといった意か。

「うちの婿さんの稼ぎはわるくなくて、そりゃもうなかなかのもんで、月に二十元にはなるんだけど、なにせ鉄道局は払いがしっかりしているからね」

赤ちゃんがむずかりはじめたので、おばあさんはうちにもどることにし、もどってゆきながら莫須有先生にむかって声をかけるには

「莫須有先生、うちの婿どのは奥さんのいうことをよくきくのよ！」

婿どのは奥さんのいうことをよくきくらしいな、と莫須有先生ころのなかで今日の日記はこころでおしまいにしようとおもい、さてじゃあ吾輩はうちで『南華真経』でもよむことにしよう。そこに家主の奥さんがあらわれ、といっても頭をつきだしてきただけだが、なにぶん玄関が奥まっているので、首をのぼしても莫須有先生だけしかみえず、さぐりをいれるように

「莫須有先生、だれとしゃべってるの？」

「吾輩はさておき、あなたはだれかとしゃべりたいの？」

「たしかにおしゃべりしたいとおもって、だからあわてて洗濯ものをほしたりとりこんだり、とりこんだものをたたんだりまたほしたり、ごらんとおりあたしは朝から晩までこんなにいそがしいんだよ！ あたしだってひとにかわっていそがしくするのはイヤだとおもってはいるんだけど、なにせひとの世話を焼くのが大好きなもんだから、それで莫須有先生がみずから洗濯しているのをみていると腹がたってきちゃって、あんたにしたらムカつくことがあるかもしれないけど——おや、エンジュの木に虫がついてるよ！ もう、イヤなっちゃうよ！」

莫須有先生がみてみると、ビックリしたことに、エンジュの木にはたしかに虫がくっついており、さらにビックリしたことに、その虫もまた人間がビックリするのとおなじようにビックリしたらしく、莫須有先生は三次元空間において跳びあがって虫をつかまえた。

「莫須有先生、もう一回だけいわせてもらえば、あたしたちが礼儀にうるさいのを責めないでほしくて、あんたがついさっきでくわしたのはね、あたしたちの二番目のおばさんで、あたしがエンジュの木に虫がくっついてるとわめきたてたのを耳にしてまたできたみたいだけど、あたしよりひと世代若くて、ほらもうあたしにむかってヒザをまげて挨拶してるよ——二番目のおばさん、あらまあ、恥ずかしがらせるんじゃないよ！ そんなにかしこまらないで！ 元気？」

「ええ」

「まったく今日の天気といったら」

「まったくよね——仕事をしなきゃなんないのに、もう眠くてたまないわ」

「赤ちゃんの世界をしなきゃなんないひとに仕事をするヒマなんてあるわけないんだから、この暑い盛りをすぎてもうちょっとしのぎやすくなってからになさいよ——夏になると虫がでてくるのがおそろしいわ！ 木陰にはいって涼むのは大好きなんだけど、この虫がうじゃうじゃでてくるもんだからさ！」

「まったくよね」

「去年なんてうちの庭には一匹のヘビがいて、そりゃあもう、おそろしいのなんのって、なにしろ天秤棒くらのながさで、もし莫須有先生がいなけりゃどうしようもないところだったんだけど、ビックリして逃げだしちゃったら、莫須有先生は手あたり次第に石を投げつけて殺しちゃったのよ——すごく賢いとおもわない？ うちに武器をとりにもどったりしていたらヘビは逃げちゃうでしょ？ なにせ逃げ足がはやいから、そりゃあもう、おそろしいっらないよ」

「たしかに——ヘビがおそろしくないひとっている？」

莫須有先生はなんだか気分がよくなり、人生において自分の活躍について他人の口からきかされるというのはめったにないことであって、だから自分にかんすることは絶対にききもらしちゃいけないし、まして吾輩の名誉になるようなことだったらなおさらで、それがたといお世辞であろうとも、吾輩はよろこんであなたがたのお話をうかがうのである。

「ここにある石は腰をおろすのにちょうどいいけど、どれもみな莫須有先生がはこんできたもので、さあさあ腰をおろしましょうよ、二番目のおばさん」

「すわらせてもらおうわ——おばさんもすわってちょうだい」

「吾輩もすわろう」

莫須有先生はそう独り言をいうと、吾輩もすわろうとつぶやきながら、ちょっとはなれたところのライオンみたいなかたちの石に腰をおろし、こうしてはなれたところにて内緒話をきくというものなかなか乙なもんだとこころのなかでおもったのだが、ところが肝腎の話の中身がまるつきりきこえない。

「これがこうでこれがこうでこれがこうで——けっきょくみんな暮らしむきのことになっちゃうわけだけど、莫須有先生ったらあたしの口のうごきばかりみるわよ」

「きこえるきこえるきこえる——ちがうひとじゃなくて、莫須有先生はあたしがうなづくのばかりをみているのよ」

莫須有先生は自分はしょせん仲間はずれにすぎないとわきまえて、ヒザをかかえて自分ひとりの楽しみにふけり、吾輩はいちいち自分にかかわりのないことに首をつっこんだりはしないけれども、それなりに好奇心はあるのであって、とはいえ好奇心はここにはなんにもおもしろいものなんてないと告げており、そうすると吾輩としては星でもながめる以外にやることはない。吾輩はどうしようもなく怒りがこみあげてきたが、ただしこの玉に瑕ばかりはいかんともしがたく、とはいえ天上から吊り下げられた完璧なものをありがたがるつもりもなくて、たといもうひとつ別の地球があるときかされてもべつにホームシックになることはないでしょ？ こういう仇敵と友愛とがふたつもあるところからはだれだってはなれがたいものである。吾輩がこうして吾輩の住まいの玄関のところにくつか石をはこんできたのは、それに子ども六七人にすわってもらおうとおもったのであって³⁰、いまあなたたちふたりはその石にそれぞれすわっており、まだひとつ空いているよね、まだひとつ空いているよね、もしあとふたつ石がのこっていなければ、あなたたちふたりは吾輩の住まいの玄関のところに迷惑をもたらして吾輩の気分を害したわけで、まったく妙な話だが、この世のなかのものごとというのは心理的につながっているのである。などとおもっているうちにまただれかやってきたようで、もうひとりの近所の女のひとがあらわれて、またぞろペチャクチャとおしゃべりはじめ、すわってすわって、ほらすわって、またひとつの石がすわれ、莫須有先生はもともと名前というものはどうでもよいとおもっており、だからこのひとは無名のものとしてすわっておかせるよりなく、おまけにこのひとはどうやら口数がすくないひとのようで、ひとがおしゃべりするのをききながら木のしたにすわって針仕事をすることによってしばし現実を忘れられるというようなひとであり、莫須有先生はこのひとがひとり暮らしの後家さんだと知っている。とうとう薄っぺらなおばさんまであらわれてきて、薄っぺらなおばさんは生ゴミをいれた桶をかついでおり、どうやら薄っぺらなおばさんは生ゴミをいれた桶をうちからもってきたらしい。みんなそろってまずは生ゴミをいれた桶をチラッとみてから薄っぺらなおばさんの顔をみあげるわ、とおってゆくものたちも軒並み鼻を

おさえてとおってゆくわといった按配だというのに、薄っぺらなおばさんほという居ならぶひとたちに挨拶をする

「ここは涼しいね」

「三番目の妹、おすわりなさいな——あんたはいつもいそがしそうだね」

莫須有先生の家主の奥さんは薄っぺらなおばさんをまねく。

「三番目のおばさん、あたしは起ちあがらないよ」

二番目のおばさんはまったく礼儀をかまわないという姿勢でもって薄っぺらなおばさんをまねく。

「すわったまますわったまま、あんたは起ちあがらなくたっていいよ——あたしもすわらせてもらうよ」

うんと遠くはなれたところにいる莫須有先生は薄っぺらなおばさんが肩にかついだものをおろすのを目にするや否やあわててふところから日記帳をひっぱりだし、莫須有先生はどうやら今日は薄っぺらなおばさんのことを日記につけることにしたらしく、いそいでいそいで——ぼくはまるで自分がいそがされるみたいにあわてまくる！ いそいで日記帳をひっぱりだして！

あわてないであわてないで、いそいでいそいで——もっといそぐんだよ！ おもしろいと思ったらおもしろい、一言目、二言目、おもしろいと思ったらおもしろい、今日も明日も、くる日もくる日も、でくわすたびに挨拶をかわし、ひもじい腹をかかえて飢えをしのぎながら、ひとり薄っぺらなおばさんだけがかつての嫁入り道具をしっかりとこしており、あなたたちはというとヒマワリをのこしていて、その種を落花生のかわりにしたり、あるいは炒ったソラマメのかわりにしたりして、薄っぺらなおばさんのことを裏切りものよばわりしたり、あるいは土地にかじりつくみたいなのときげすんだりしているけれども、（読者はきっと土地にかじりつくことを土地をきりひらくことだとみなすだろう）ただ薄っぺらなおばさんだけが毎年たくさんのおもいものをつくっているのにひきかえ、あなたたちはとうちっぽけなカゴをぶらさげて豆炭をちよっただけ買いにゆくのがやつのことで、残念ながら皇帝が折悪しく打倒されちゃったせいで、あなたたちの個性はすっかり埋没してしまい、そうでなければきっとおもしろかっただろうにねえ。薄っぺらなおばさんの娘はとびきりおもしろい子で、ある日なんぞクツなおし職人のところに新しいクツをとりいった帰り道でのことなのだが、はるかむこうのほうに莫須有先生が散歩しているのをみつけたかとおもうと、あわてて両手を背中の方にまわし、おそらく新しいクツを莫須

30 莫春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞に風し、詠じて帰らん（莫春者春服既成、得冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞、詠而帰）『論語』先進

有先生にみられたくなかったのだろうが、それはちょうど莫須有先生が南むかって歩いているとして、その子は北のほうからやってきたような具合だったのだが、往くものは矢のようにまっすぐにまえをむいており、来るものは手をうしろにまわしてうつむいており、とにかく一刻もはやくすれちがってしまいたいというふうであり、すれちがったかとおもうと、その子はくると首をまわして莫須有先生をみるし、莫須有先生もくると首をまわしてその子を見れば、その子は手を背にまわしたままくると首をまわして莫須有先生をみたので、だから莫須有先生はその子が背中のほうで手にもっている新しいクツがみえてしまったのだが、その子はどうも自分の手にもっているものがなんであるのか莫須有先生にはみえていないとおもっているのだ！ その子はもう学校に아가って、今日は学校がはじまる日なのでほかの子はみんな新しい服をきていて、おかあちゃん、あたいも新しいシャツがきたいというので、おかあちゃんは新しいシャツをきせてやり、今日は旧正月だからといっておかあちゃんはあたいにお粥をとりゆかせ、今日は旧正月だからといっておかあちゃんはあたいに新しい綿入れをおらせ、あたいは新しい綿入れをおって、あたいはとってうれしくて、あたいは街にゆき、お粥をほどこすところにお粥をもらいにゆき、今日は旧正月だからといっておかあちゃんはブタにお粥を食べさせるつもりだったんだけど、あたいはお粥をほどこすところにはいらせてもらえず、あたいは泣きながら帰ってきたんだけど、薄っぺらなおばさんは気づかなかったみたいで、お粥をほどこすところのひとはあなたの娘が新しい綿入れをおっていたので貧乏人じゃないとおもってお粥をほどこすところにはいらせなかったのだよ。さてこれで一頁ぶんの紙はうまったから、あと一行ぶんの空白をのこすだけとなった。はっくしょん！ 薄っぺらなおばさんはでっかいクシャミをする。薄っぺらなおばさんは生ゴミをいれた桶をかつぎあげて帰ろうとしている。

「三番目の妹はもうちょっとすわってゆかないの？
いっちゃうのかい？」

「もうゆくよ、おねえちゃん」

「三番目のおばさん、あたしは起ちあがらないよ」

「あんたは起ちあがらなかつたていいよ、すわったまますわったまま」

すわったままのひとが去ってゆくひとの背中を指さしながら口をとがらせて文句をいうには

「あの三番目ときたらイヤんなっちゃうわ！ みんな

がここで涼んでいるっていうのに、あんな生ゴミをいれた桶をかついでくるなんて！」

「おねえちゃん、あたしはあのご老体のことは気にしないことにしているのさ」

そして庭の垣根にひっかかっているナツメの木のほうを指さしながら口をとがらせて文句をいうには

「あたしは夜中に風が吹きやしないかと心配で、というのも風が吹くとうちのナツメの実が落っこちてしまうからなんだけど、まだ夜が明けるまえに寝床からはいでて、玄関をあけてひろくにいつてみたら、いったいナツメの実はどうなってたとおもう？ ひとつのこらずあの一とがひろちまっていたのさ！ なんとまあ早起きなことと感心しちゃったよ！」

莫須有先生はいそいそと日記帳をひろげてまちがいを訂正しているに

「家主の奥さん、あなたのいつているのは去年のこと、今年はまだその時期になっていませんよ」

「だって忘れようにも忘れられないじゃない？」

そういつているそばから例のまったく礼儀をかまわないおばさんは垣根にひっかかっている青いナツメのほうをながめながらなにか考えこんでいるような感じで

「じつはあたしも毎年いただいちゃっていたんだけど、ゆるしてくれる？」

「二番目のおばさん、あたしたちふたりはなかよしなんだし、それにあなたはガツガツしていないから、たとい花をつんでも髪にさしはさんだりしないようなひとで³¹、どうぞ好きなだけ食べてよくって、どうぞ遠慮なく、どうぞ遠慮なく」

などとしゃべっているところに薄っぺらなおばさんの声が庭の垣根のなかからきこえてくる。

「あらまあ、半分のこつてる冬瓜はもういらぬわよね！——だつたらまあ、うちのブタのものだわ！」

どうやら薄っぺらなおばさんは莫須有先生がうまいものを食べるころ³²である家のなかに生ゴミをいれた桶をかつぎこみ、その桶のなかに半分のこつてる冬瓜をほうりこもうとしているらしい。

「はっくしょん！——だれかあたしの悪口をいつてるわね！」

なんとまあ薄っぺらなおばさんは二回目のクシャミをかまし、莫須有先生はあわてて日記帳をひらいて筆

31 花を摘むも髪に挿まず、柏を採りて動もすれば掬に盈つ（摘花不挿髪 采柏動盈掬）杜甫「佳人」

32 夫の稲を食らい、夫の錦を衣る、女に於いて安きか（食夫稲、衣夫錦、於女安乎）『論語』陽貨

をはしらせる。笑っちゃいけない笑っちゃいけない、だれかがあとでわれわれの笑い声をきいたらわれわれがだれかを笑っていたといわれてしまいかねない。おもしろいったらおもしろい、おもしろくて笑っちゃよ。

第十一章 莫須有先生がラブレターをかくことなど

今日にかぎって莫須有先生はいったいなにがあったのはわからないけれども、お茶は飲まず、ご飯も食べず、窓も扉もしっかりと水も漏らさぬように閉めきって、ずっとそのまんまというありさまで、いまだにそれをつづけている！ あらかじめハッキリと宣言してはいて、それはどういう中身なのかっていうと、今日はよほどのつびきならぬことがないかぎり、家主の奥さん、はいてこないでいただきたい。よほどのつびきならぬこととはどういうことなのかって？ たとえば隣のうちが火事になって、だんだん火の勢いがつよくなってこっちに燃えうつりそうになったら、ガラスをたたきわって警報を鳴らすといったことは、これはもう緊急事態なのであるからして、もし吾輩が八十三万の兵馬をひきいながらヒゲをそりおとし服をぬぎすてるといったようなことになったとしても¹、そんなことはどうでもよいのであって、だれもケガをしなかったかどだけたずねて馬のことはなんにもいわぬなんていうこともあったらしいが²、いったい年老いた農夫というものは、なにかにつけて一歩しりぞいて冷静になるということができず、そういう災難をちっとも災難だとわきまえられなくて、そんなふうには吾輩がたとい焼け焦げてしまったところで世間のひとにとってはどうでもよいことにすぎないのであって、ちょうど無理やりに誘拐されたようなもので、だったら吾輩はどうして逃げないでおこうとおもうなんてことがあるか？ これがのつびきならぬことのひとつ。あるいは誠実なところをいだきながら、あるひとがたずねてきたとして、おやまあ、ホントか、ウソ

か、それとも夢か？ とにかくあなたはなるべく迅速に知らせてくれなきゃいけない。このふたつ以外のことでドアを開けてはならない。いったいそとでるときドアをとおらないものがあるだろうか？³ というわけで吾輩はけっして駆け落ちなんていうことはしないから、そのことはなにとぞご安心いただきたい。それに自殺なんかも絶対にしないし、こういうことは念を押すまでもないわけだけれども、だってここはどういうところかっていうと、ぐるりと紙筆墨硯にかこまれたところなわけで、いにしえの聖人や賢者のいさおしが隅々までゆきわたっており⁴、なにはともあれ一切切の責任はことごとくあなたにかかっているのである。……

というそばから責任の主はドアのそとで足踏みをしている。あたしはなにがなんでもなかにはいってみせるわ！ なんでまたこんなに朝から晩までずっとひきこもってるの！ もうお日さまが西にしずみかけてるんじゃない？ どんなことがあるうともなかにはிரいたいたらはいりたくって、なかにはいるさいには、かならずちゃんと声がけをいたしましょうね⁵、ところがまったくなんにも反応がない。そろりそろりと足をふみいれて破れた靴下をそろりそろりと、おまけにもうひとつ用心をつけくわえて、まるで生きていないみたいに息を殺し、手さぐりで壁づたいに、みるといったらかならずみてやるんだから、一、二、三、おやまあ、なにかも相変わらずのまんまで、なにかもまるでお客さんを待ちうけているかのようで、屏風にえがかれた金のシャコはまったく色あせておらず、いまにも飛びたちそうないきおいで、莫須有先生はというと机にうつぶせになっており、とはいえイビキはかいておらず、ぐっすりと昼寝をしているらしく、あたりはメチャクチャに散らかっており、風に吹きさらされ雨に濡れそぼったようになっているのは、すべてみな梅の花柄の便箋で、それは史湘雲の枕に縫いとられた芍薬にはおよばずとも、賈宝玉が水に浮かべた桃の花よりもずっとよくて、ありとあらゆる身体、書

1 馬超・徳・馬岱は百騎余りを率いて、本陣に突入し、曹操を生け捕りにしようとした。曹操は乱軍のなかで、「紅色の戦袍を着たのが曹操だ」という西涼軍の叫び語 Toscanini を聞き、馬上で慌てて紅色の戦袍を脱いだ。また「長い髯のやつが曹操だ」という叫び声が聞こえたので、驚き慌てて、腰におびた刀で髯を剃り落とした（『三国志演義』第五十八回「馬猛起兵を興して恨みを雪ぎ 曹阿瞞 髯を割き袍を棄つ」井波律子訳・講談社学術文庫）

2 厩、焚けたり。子、朝より退きて曰く、人を傷える

か。馬を問わず（厩焚。子退朝曰、傷人乎。不問馬）『論語』郷党

3 子曰く、誰か能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由ること莫きや（子曰、誰能出不由戸。何莫由斯道也）『論語』雍也

4 放勳は欽明、文思は安安、允に恭しく克讓、四表を光被し、上下に格る（放勳欽明、文思安安、允恭克讓、光被四表、格于上下）『書経』堯典

5 将入門 問孰存 将上堂 声必揚 『弟子規』

物、地面、硯台、ありとあらゆるところに散りかかっている。

「なるほど手紙をかいていたんだね」

帰りたくなくなったのかふたたびこっそりとのぞきこみ、ぐるりと目のとどくかぎりをながめわたし、それから洪崖の肩をたたくようにして⁶

「莫須有先生、起きてちょうだい」

「風雨はげしく真つ暗闇で〜ニワトリどもは鳴きやまず⁷〜吾輩は夢のなかで詩筆をとって恋心をかきつづり⁸〜牡丹の花をかきつけて巫山の神女にささげ〜」

「あらまあ、なんて素敵なお歌だこと」

「いきなり頭をもたげておもわず知らず⁹〜」

きっと京劇のなかの歌の一節だわね。おや目ヤニをぬぐってるよ。

「いつのまにか眠ってしまっていた」

「便箋がそこらじゅうに散らばっているから、あたしが片づけてあげましょう——」

「このままのほうがうつくしい、というのも吾輩のからだに散りかかっているさまは、まるで袈裟をまとっているかのようで、あなたは信じてくれないだろうが吾輩は坊主にだってなれるのであって——」

「おやまあホントだ、ナムアマダブツ！」

「かなしい哉、かなしい哉」

「だれに手紙をかいていたの？」

「どうせとどきこないんだから、きいたってしょうがないさ。いましがた真夜中の空のうえに飛行機があらわれてこなかった？ 今宵だれしも月あかりをながめていることであろうが¹⁰、爆弾をむやみに落したりしちゃいけないのに、いくら常娥が世をはかなんでいるからって、いちばん怖いのは死ぬことで、もはや逃げるところもないのだよ」

「あんたったら寝言をいってるのかい！」

「雁が飛んでゆく、こころが痛む¹¹、情報はつたえなくても情愛をとどける——だれもわかってくれないが、あのひとはわかってくれる」

「明日は中秋節だから、これから街にいったり月餅を

買ってきてあげようとおもっているんだけど、あんたはこの一日でずいぶんゲツソリしちゃったわね」

「ちっともそんなことはなくて、吾輩のこころはいつだってハッキリしていて、いくらでも天下国家のことを談じられるし、信じられないというなら地図をかいてみせてもいいけど、これが黄河、これが長江、長江は東へとながれゆき、ながれながれてこのあたりまできて折れまがると九江になり、莫須有先生はここで生まれ、ここで育ち、こうしていまや国破れて山河在り¹²、春草明年緑ならんも¹³、もどってくるたびにおなじ景色で、ここ、ここ、このでっかい丸のなかにちっちゃい丸があり、そのちっちゃい丸のなかに黄色い丸があるけど、われらが北京なのであって、莫須有先生の人生においてもっとも、もっとも重要な場所だ」

「ここを西にのぼっていったところがあたしたちのいる門頭村ってことね」

「莫須有先生がせつかく世をすてて隠れているところを、あなたときたら無神経にもバラしてしまったね！」

「ひとのことを責めちゃいけないっていうけど、なにかもかああなたのせいなのであって、もし地名さえもだれにも知らせていなければ、みんなもあなたといっしょのように苦しむことになるのであって、なにかしてあげたいという気持があったってどうしようもないじゃないのさ」

「それはまあそうで、お釈迦さまが歩いた足跡からは蓮の花がさいたっていうけど、どうしてこんなに山また山の川また川というふうにけわしいんだらう？ まったく、どうかひとつ吾輩にゆっくり推敲させてほしいもんだが——あなたはきっと吾輩のかいた手紙をこっそりのぞいたよね！ まったくもって腹がたつたらないよ！ どうしてまた吾輩のかいたものがラブレターだとわかったわけ？」

「なんだってそんなふうがいいがかりをつけるのさ！

そんなふうにビビるっていうことはこころにやましいところがあるんだね！——あたしは文字なんてこれっぽっちもよめないんだよ！」

「じつは文章がものすごく上手なんだけど、よほども

6 左には浮丘の袖を叩き、右には洪崖の肩を拍つ（左『浮丘袖、右拍洪崖肩』郭璞『遊仙詩』其三

7 風雨は晦の如く 鷄鳴は已まず（風雨如晦 鷄鳴不已）『詩經』鄭風「風雨」

8 我は是れ夢中に彩筆を伝う 花葉に書朝雲に寄せんと欲す（我是夢中伝彩筆 欲書花葉寄朝雲）李商隱「牡丹」

9 原文の「猛抬頭不覺得」は未詳。

10 今夜月明人尽く望むも 知らず秋思の誰が家にか在る

（今夜月明人尽望 不知秋思在誰家）王建「十五夜望月」

11 雁過ぐるや 正に傷心 却って是れ旧舊時の相識たり（雁過也 正傷心 却是旧時相識）李清照「声声慢」

12 国破れて山河在り 城春にして草木深し（国破山河在 城春草木深）杜甫「春望」

13 春草 明年緑ならんも 王孫 帰るや帰らずや（春草明年緑 王孫帰不帰）王維「山中送別」

ののわかったひとでなければその値打ちはわかりっこなくて、ふたつの便箋にかかれたものを吾輩はよんであげよう——はじめにかいてあるのはみんな事実だから、あなたに知らせるわけにはゆかないとしても、どうせあなたにはなにがなんだかチンプンカンプンだろうし、こうでありたいという願いをいっているんだけど¹⁴、こんなふうだよ

いったい天の川というものは、ちょうど女の子のまとう布きれのようで、天の神さまは吾輩をここへとみちびき、二三度ながく声をひいてうそぶく。むかしからの馴染みのように対岸はながめられるが、ながれゆく水の無情なることはいかんともしがたい。どこまでも澄みわたっているながれのなかに、いくらかとめようとも魚のすがたひとつない。飄飄蕩蕩、赤いものひとつおよいでいない。うつくしいひとを恋い焦がれるばかり——ねがわくは人のとこしえに恙なきことを。

吾輩はなにはさておき「人」という字が好きなのである。あなたは河をわたってはなりませんとうたっている¹⁵。李白の『横江詞』にたぶん影響をこうむっているが¹⁶、といっても領域がちがうわけで、あなたも天の川のことだったらよく知っているんじゃないかな。ちゃんと平仄をふまえて詩をつくる時にはそれなりの境地がなけりゃならないんだ

「いまが何時かっていうこと、あんたわかってる？ お腹はすいてないの？」

「こういう話をしているときにご飯のことをいうのはどうかとおもうが、だから吾輩としては眠ったきり起きないつもりだったんだけど、あなたに起こされてしまったからには、こうなってはもう吾輩の知ったことじゃなくて、すくなくとも節句のまえにお金をはらうことはごめんこうむる」

「あんたはあたしにお金をはらうことはないし、あたしもあんたのお金をもらうつもりはないよ！ さっきこの近所にクワイ売りがやってきたので、1キロばかり買ったんだけど、土鍋で煮ておいたから、よかったら食べてごらんよ」

「それはうれしいなあ。そういうものは吾輩ははまだ食べたことがないのだけれども、おもうにさぞかし味わいぶかいものであろう」

「おいでなさいな」

「まいりましょう」

そこでクワイを遠慮なくいただくことにする。漏れ

つたわるところでは莫須有先生はどうやら肉好きらしく、そのことは人生最大の痛恨事のように、さいわいなことに詩趣がいくらかのこっていて、肉屋のまえをゆくときは小走りでおとりすぎ¹⁷、それがまたわるい印象をもたらしているようである。あるとき岸辺のヤナギにそって、しのつく雨のなか、傘をさし、ロバにまたがり、青龍白虎の橋をわたって、天下第一泉¹⁸へとおもむいたが、それは細頭魚をあがなうため、その買いもとめたものを家にもってかえって母親がやったようなやりかたで調理したいとおもっていて、その日はまったくもって大忙しであるすがたが目にはいい、醤油や酢、それにネギ、それはもう天手古舞いで、厨房はべつにせまいというほどでもないのだが、さりとてふたりがいっしょにいるというわけにもゆかず、家主の奥さんは居ても立ってもいられなくなる。おもわず口をはさんでいうには、あたしはうまれてこのかた五十歳になってはじめてこんなに新鮮な魚を食べるよ。すると莫須有先生は、こんなのはちっともたいたことないじゃないか！ 吾輩がいつか帰省して年越しをすることがあったら、きっと吾輩の母親にたのんで燻製にしたやつをどっさりもってくるからさ。ああ、すみわたった水にこえふとった魚¹⁹、あなたたちとは無縁のものなんだね。それに餅を焼くこともまた大好きなのであって、しかも囲炉裏にみずから身をはこんで、おしゃべりをしたり、くつつきあったり、ずっとそんなふうにしなげら、手にポンとおかれたら、その手のうえのものはすぐに食べる。それにしても今日という日のいまになってクワイをもらうことになろうとはおもいもよらず、吾輩はつい意見をのべてしまい——

「もうできているのかしらん」

「もうできてるよ。あとはお湯がわけばよだけ。このクワイってのは、なにひとつ捨てる場所がない食べもので、ほんとうにすごいよ」

「なるほど、それに見た目もよくて、まるでサトイモみたいですね」

14 盍ぞ各おの爾の志を言わざる（盍各言爾志）『論語』公治長

15 「公無渡河」は「樂府瑟調曲名。四言四句、以歌辭首句「公無渡河」而名」（『辭源』第三版）

16 公河を渡る無かれ 歸去來（公無渡河歸去來）李白「横江詞」其の六

17 鯉、趨りて庭を過ぐ（鯉趨而過庭）『論語』季氏

18 山東省済南市の城内にある趵突泉。

19 桃花流水 鱖魚肥ゆ（桃花流水鱖魚肥）張志和「漁歌子」

おもわず一個をつまみあげてみたところ、どうしても庭のほうにもってでて食べたくなくなってしまった。そういえば今日はまったくお日さまをおがんでいなかった。いきなりあっちをむいたかとおもうと、またこっちをむいて、足で地べたにくるりとひとつ丸をかいてみせ、クワイの香りはほんのりただよっており、莫須有先生はなにか一言いおうとおもったのに言葉が浮かんでこず²⁰、憂いをふくんだ顔つきはまことにうつしく、急にふりむいたかとおもうと、こういった——

「家主の奥さん、これってあなたたちの玉泉山のクワイでしょ？ とてもよい香りがするものとして、われわれ南のほうにも似たようなものがあつたのを吾輩はおもいだそうとしているんだけど、吾輩はどうしてもおもいだせないのですよ！」

「それはどんなものなの？」

「いまおもいだすから待つてほしいんだけど、吾輩のふるさとよ吾輩のことを見捨てないでくれ——おお、そうだった、ヒシの実だ！ ヒシの実だ！ ヒシの実だ！」

そういうとピクリともうごかなくなり、呆けたように空をみあげてボンヤリしている。いったい人間がものをおもうというのは鳥が目のまえを飛びすぎてゆくようなものである。空にはもう星があらわれているのかしら？ トントントン、こんな時分にドアをたたくひとがあろうとは、まったくビックリするつたらありゃしない。

「家主の奥さん、まだなにかほかにも吾輩のために支度してくれていることがありますか？ 今日の晩ご飯とか？ ドアのそとにだれかきたみたいだから、ちょっとみてきてくれませんか？」

「あんたは部屋のなかにもどっていなさい。あんたのお客さんだったら知らせてあげるから」

だからピクリともうごかず、鳥が目のまえを飛びすぎてゆく。空にはもう星があらわれているのかしら？ お月さんはもうすぐのぼってくるだろう。ホント？

信じる？ 自信ある？ なにが？ 人類ってやつはかわいそうなものであって、それにおかしなものでしょ？ 昨日のことはおぼえているけれども、明日の朝があなたのものとはかぎらないでしょ？ なんてまた「明日の朝」なんていうの？ あたりはもうすっかり夜の帳がおりきっている。……

「莫須有先生！ やってきたのはだれかとおもったらふたりの巡査だよ！」

「なにか話があるならきけばよいだけなのに、なにをそんなにビクビクしているの？」

「なにかあるっていうわけじゃなくて、ただ戸籍をしらべにきただけで、あんたにつたえてほしいっていわれていたんだけど、あんたはなにをするひとで、いま歳はいくつかってことをたずねていたわ。じつは午前中にもやってきたんだけど、あたしは追い返しちゃうて、というのまああいうイヤな連中とはあわないでよいならあわないにこしたことはないでしょ」

「ははは、ひとつめの問いに答えるのは簡単で、ついきさきも知らないうちに哲学者になってしまっていたけれども、かれらに莫須有先生は哲学者だとつたえてください。ふたつめの問いだけど、吾輩が手紙をかいて母親にたずねるのを待つてほしいんだけど、というのも母親だったらきっと吾輩の誕生日をおぼえてくれるからね」

「なにもそんな面倒くさいことをしなくたっていいんじゃない？ あたしがうまいこといっておくから、それであいつらを追い払ってしまおうよ」

「おまかせします」

「そんなむつかしい顔をしないでちょうだい！」

といいながらいつのまにかすがたを消してしまっていた。

(2020. 8. 27受理)

20 此の中に真意有り 辨ぜんと欲して已に言を忘る（此中有真意 欲辨已忘言）陶淵明「飲酒」其の五